

日本のポンペイ「胡桃館遺跡」を考える

ミニシンポジウム「胡桃館遺跡を考える」が8月4日、鷹巣中学校で開かれ、考古学ファンなど約60人が同遺跡の発掘成果などについて理解を深めました。その内容を紹介します。

この6月から市教委と奈良文化財研究所が合同調査を開始

胡桃館遺跡は、今から約1千年前の十和田火山の噴火によるシラス洪水で埋没したといわれている平安時代の遺跡。イタリヤ・ヴェスヴィオ火山の大噴火で埋まったポンペイ遺跡に例えられることもあります。

昭和38年に現在の鷹巣中学校野球場整備の際に発見され、その後の発掘調査で4棟の建物跡やその周りを取り囲



▲考古学ファンなど約60人の市民が参加したミニシンポジウム「胡桃館遺跡を考える」

む柵跡が見つかりました。このときに出土した木簡(文字が書かれた木札)が37年後の平成16年に独立行政法人奈良文化財研究所(以下「奈文研」)の調査で解説され、これをきっかけに市と奈文研がこの6月から、当時発掘された建築部材全体について最新の技術を用いた調査を進めています。

■十和田火山噴火と「八郎太郎」伝説

シンポジウムは、遺跡の特徴や調査成果の概要などを地域のみなさんに紹介し、理解を深めてもらうとの趣旨で開かれたもので、司会には遺跡発見当時、鷹巣農林高校の教諭として調査に携わった元県立博物館長の富樫泰時氏を、また紹介者として今回の調査にあつている奈文研の研究者・箱崎和久氏を招き、同氏と市教育委員会の職員が説明役を務めました。

2部構成で行われたシンポジウムの第1部では、鷹巣西小学校の児童が出演、朗読役を務めた民話「八郎太郎」



▲昭和42年～44年には、組織的な調査が実施され貴重な建築材などが出土しました

のビデオが上映され、聴き手に訴える語り部ぶりに参加者も感心しながら鑑賞していました。民話は、十和田火山の噴火やシラス洪水に題材をとったものと言われ、同小の6年生は、この民話にまつわる場所を訪ね、また十和田火山の噴火について学習し、学ぶ楽しさを体験しています。

■ノミの加工跡などが残る建築材

第2部では、遺跡の概要説明のあと、奈文研・箱崎研究員が、「遺跡からの出土建物の一つは、板校倉と呼ばれる構法。また別の建物は静岡県の登呂遺跡で発見されたような高床式の建物。建築材にはノミや手斧などの道具を使った痕跡がはつきりと残っている」と、専門的な観点から建築上の特徴を紹介。その上で、「部材が、当時の状態を保持して発掘されたことは、たいへん貴重」「平安時代のこのような建築物の遺跡が地方で発見されたことは他に例

「炎」の演出、郷土芸能など多彩に

森吉山麓たなばた火まつり

旧盆の七夕行事「第21回森吉山麓たなばた火まつり」(池田文明実行委員長)が8月7日、阿仁前田・河川公園を主会場に開催され、地区内外から訪れた見物客が、郷土芸能や絵灯籠、花火など盛りだくさんのイベントを楽しみました。

この行事は、前田地区で集落単位で行われていた七夕行事を一堂に集め、地区の活性化と伝統芸能継承を目的に一大イベントとして盛り上げようと始まったもの。開催にあたっては、前田地区のボランティア組織「森吉山麓村おこし会(池田文明会長)」が地域住民の協力のもとで企画から運営までを行っています。

午後4時から始まったイベントは2部構成。第1部「たなばたまつり」は前田小学校のロック・ソーランでスタートし、



▲夜空を華やかに彩った打ち上げ花火



▲森吉山をイメージした仕掛花火



▲七夕供養の文字やくまげら、奥森吉の名瀑「三階の滝」を表現した火の演出



▲前田小児童によるロックソーラン



▲火祭り太鼓の迫力ある演奏

豊かな灯籠の行列が会場内に入ると、その幻想的な美しさで観衆を魅了しました。午後8時から行われた開会セレモニーのあと、対岸の河川敷に森吉山をかたどったラインや「ようこそ北秋田へ」「森吉山火まつり」「七夕供養」「天の川」などの文字、また、クマガラの形が炎の列として浮かび上がり、阿仁川の川面が赤く照らし出される中、第2部が開会しました。

この後、割物やスターマインなどの花火が次々に打ち上げられたほか、スキーが滑降する姿やあきた北空港を飛び立つ飛行機、三階の滝などを炎と仕掛花火で演出し、会場を喜ばせました。

フィナーレでは、全長145・4m(森吉山の標高の十分の一)もの超特大ナイアガラと大スターマインが華やかに火まつりを締めくくりました。

がなく、日本建築史の空白を埋めるといつても過言ではない」などと、発見の重要性について述べていました。

続いて市教委の榎本剛治主任学芸員が出土木簡について説明しました。

■最新の技術を用い墨書を解明

木簡はこれまで3点見つかり、赤外線照射という最新技術を用いた調査によって肉眼では判読できなかった墨で書かれた文字の解明が進んでいます。

榎本学芸員は、「玉作」「伴」などこの地方に住んでいたと思われる人の名前が書かれていること、「米一升」「米三合」など米の量を記す文字などから、米を支給した記録ではないかと推測されていること、また別の木簡には読経した記録が書かれていたことから、建物には寺院だった可能性もあることなどを紹介しました。

参加者の関心も高く、質疑応答では会場から「建物の上屋部分が残っていないのは、洪水で流されたのではなく腐食が原因では」と、自分なりに推測した質問も出されていました。

遺跡合同調査は今年の末まで継続して実施され、まとまった調査結果が報告される予定です。調査については、次までお問い合わせください。

■北秋田市教育委員会生涯学習課
☎626618